

## ブラジル調査報告

### ブラジルの日系人・日本人・日本語人に関する調査

東京外国語大学大学院総合国際学研究院

武田千香

リオ・デ・ジャネイロ州立大学

キタハラ・タカノ・サトミ

#### I. ブラジル・リオデジャネイロの日系社会調査

##### (1) 概要

- 期間：2011年8月7日～8月25日（滞在期間：8月8日～8月23日）
- 場所：リオデジャネイロ市
- 調査内容
  - ー聞き取り
    - 日本語教育従事者
    - 日系団体関係者
    - 日本文化活動従事者
    - 在外公館勤務者
  - ーその他イベント参加

##### (2) リオデジャネイロの日系社会について

- リオデジャネイロの日系社会の歴史と特徴
  - 1908年6月18日以前の歴史がある。
    - 旧いところでは1880年代の「帝国サーカス団」
  - 1907年12月、サント・アントニオ耕地に入植
- 20世紀前半
  - 1915年～1916年：州内150名、首府内50名（推定）
  - 戦前は複数の商会
  - 農業より商業
    - 同化傾向が強く、現地人と結婚。
- リオデジャネイロの日系団体
  - 1948年に初の日系団体：「リオデジャネイロ・スポーツクラブ」
    - 他州の日系人が中心となって設立
    - 現在の「連盟」の前身
- リオの3日系団体
  - 「リオデジャネイロ州日伯文化体育連盟」（「連盟」）⇒リオ州

- 「リオデジャネイロ日系協会」(「日系」) ⇒リオ市 (1972年創立)
- 「日本文化協会」(「文協」) ⇒非日系が対象 (1936年に前身創立)
- 「イシブラス」の存在
  - 石川島ブラジル造船所
  - 「イシブラス」=「日本」の時代も  
⇒日系人・日本人・日本語人の三者が協働で作った社会

### (3) 聞き取り調査

実施概要：調査期間：2011年8月9日～8月19日

方式：聞き取り→録音→書き起こし

質問項目

- 「日本語」という紐帯がどこでどのように機能しているか？
- 3つのコミュニティの関係について
- 日本語・日本文化の地位はどうか。
- 今後、日本語はどうなっていくか。どうあるべきか？

#### ① 加藤玲子氏 (日本語教師、日系1世)

[プロフィール]

本学卒業生。1964年卒。新聞社勤務後、1974年に渡伯。教会で日本語指導にあたったとき以来、日本語教師歴32年。日系協会、文協等で教え、現在は大学で日本語および日本語教授法の非常勤講師。

[特記事項]

- 日系協会は当初は日系中心で、家で日本語を話している人たちに教える日系人対象の継承言語教育。1984、5年ごろから非日系がぼつぼつ入ってきて、日系人教育とはいえなくなった。最近は非日系が多い。
- 83、4年にリオ連邦大の教員になった非日系ソニア二宮氏は画期的。
- 日本語を自分のアイデンティティとしているような人は、日系協会に子どもを連れてくるが、子どもは日本語を紐帯として使えるようなレベルに達しない。
- リオは日本人、日系人、日本語人がくっついている。サンパウロは別。
- とはいえリオの日系社会でも駐在員より移民の貢献度が高い。
- 日本語だけでは出世は難しい。中国語のほうが有利。日本語は落ち目。

#### ② エリーザ・マサエ・ササキ氏 (大学日本語学科教員、日系2世)

[プロフィール] 1971年サンパウロ生まれ。家は寺(仏教)。14歳のときに日本へ単身留学。社会学博士。専門はブラジルの日系コミュニティおよび日本への就労。リオ出身の非日系ブラジル人と結婚後リオに移る。現在は大学で日本の社会、歴史、文化を教えている。

[特記事項]

- 日本語への入り口として宗教とスポーツの存在は小さくない。

- クリチーバでは日系人と日本人の関係が難しいと言うが、リオは違う。
- リオに比べてサンパウロの日系人は日本文化の代表という意識が強い。
- リオの大学の日本語学科教員がブラジル初の黒人ということは誇らしい。サンパウロでは考えられない。大学では学生の黒人の比率が高い。
- サンパウロの日系人には日本語能力への期待にプレッシャーがある。
- ブラジルでは「オリエンタル＝日本人」というイメージが強い。
- リオは日系社会を通さずとも日本文化が社会に伝わる。自由。サンパウロだったらこんなに幸せじゃなかった。
- リオでは、きっかけはポップカルチャーが90%。漫画は言語理解が必要。

### ③ 鹿田明義氏（日系団体役員、日系1世）

〔プロフィール〕 東京生まれ、大学中退、1957年渡伯。1960年以来、修理工場経営。リオへはイシラス全盛時代に移る。日系2世と結婚。娘2人。

〔特筆事項〕

- ブラジルで生活するのなら日本語は必要ない。後から振り返れば日系人だったら、多少日本語を知っていてもいいかとは思いますが、あくまでも心理的・精神的なもの
- ことばは世界の経済に支配されている。日本経済がいいときは商業価値があったが、今は中国語のほうがいい。
- 日本語はある程度このままでいくのではないか。継承言語教育から外国人向けの言語教育への転換はすでに始まっている。継承言語としての日本語教育は難しいだろう。
- 今。足りないのは教師。

### ④ 園尾彬氏（日本語学校校長、日系1世）

〔プロフィール〕 1939年、北九州市出身。農業移住をした後、ハッカ製造会社、移住事業団、鉄鋼会社、大使館に勤務。その後、通訳・翻訳業に従事しながら日本語教育に携わり、1984年よりリオデジャネイロ連邦大学日本語学科教員。同年日本語学校を設立。

〔特筆事項〕

- 日本からの駐在員をばかにしている。
- （3つのコミュニティは）だんだん近づいてきている。
- リオはかなり昔から日本語を外国人に教えてきた。サンパウロは遅れている。リオは継承言語教育はしてこなかった。
- 日本語は95年ごろから急降下。
- 80年代の動機は経済だったが、今はアニメ。
- 日本語教えると同時に日本文化（精神）を教えることが大切。
- 私は昔の日本人なのではなくて、外国に出てきた日本人である。
- 移民の子だとばかにするな。私はブラジル人。自分で選んだブラジル人。

### ⑤ 牧田弘行氏（日系団体役員、日系1世）

〔プロフィール〕 本学OB。ブラジル在住 51 年。イシブラスへ派遣され勤務。初代文化協会会長。妻は日系 1 世。2 人の子ども（いずれもブラジル生まれ）。

〔特記事項〕

- 日本語を知らなければ日系人とはいえない。日本語がなくなったとき日系人でなくなる。
- 継承言語教育と外国語教育はすでに一体となっている。日系人にも外国人として教えている。
- リオでのイシブラスの存在は大きい。（「イシコーラ（学校）」）
- 中国語は教えられても、中国文化は教えられていない。日本文化はブラジルでは興味を持ってもらえる。
- リオでの日本語のプレゼンスは 10 年前ぐらいになくなった。2008 年の記念事業は最後の盛り上がり。
- 日本語は維持してもらいたい。
- NHKが見られるようになって感慨がなくなった。

#### ⑥ 蓮尾良昭氏（日本総領事館文化担当、日系 1 世）

〔プロフィール〕 1950 年生まれ。大学院でブラジル文学を学び、フルミネンセ連邦大学に留学。そのまま定住。連邦鉄道に 7 年間勤務。歯学部に入學するが中退。その後リオデジャネイロ連邦大学法学部ににゅうがく。87 年より総領事館に勤務。リオデジャネイロ連邦大学文学部日本語学科での教歴がある。妻は非日系ブラジル人。家庭内はポルトガル語のみ。

〔特記事項〕

- リオは昔から非日系に日本語を教えてきた。
- リオは日系社会の規模が小さいから、駐在員も日系人も混在。3 つのコミュニティの境界は、リオでは存在しない。
- リオでは、日系人と非日系人の意識の違いはない。日系人もどこまで日系人という意識を持っているのだろうか。
- 最近日本語では非日系人が優秀だ。ポップカルチャーやアニメの影響が大きい。日本語はこうしたものに支えられ、担い手は非日系人になっていくだろう。

#### ⑦ 関口ひとみ氏（日本総領事館広報文化センター所長、日系 2 世）

〔プロフィール〕 サンパウロ大学出身。

〔特記事項〕

- 今後、継承日本語教育は自然消滅すると思う。
- 日本語は今が正念場。中国は政府が力を入れている。だが日本ブランドの力は大きい。日本文化は日本語の勉強のきっかけになる。
- アニメや漫画、ゲームの力は大きい。K ポップもあるし、中国は漫画大学を設立。このままではとられてしまうのではないか。

- ただ明るい話もある。サンパウロやパラナでは効率の小中学校に日本語が導入された。
- ブラジルの他の地域、たとえばパラ州では、1世や2世がしっかりと日本語を継承している。ブラジルは広いので日本語教育には差がある。

#### ⑧ ジャネッチ・オリヴェイラ氏（大学日本語学科教員、非日系）

〔プロフィール〕 30代。2001年ごろ日本語と出合う。きっかけは12歳下の弟と妹がアニメに興味を持っていたこと。今は日本のドラマにはまっている。浜松市立高校国際学級（ポルトガル語）の教諭として1年7か月、滞日。

〔特記事項〕

- 日本語を話したくて元留学生や日本に住んでいた人とよく集う。
- リオは、日系人と日本人のコミュニティが少ないから、日本語ができる人にとってはサンパウロよりもチャンスがある。もしサンパウロだったら日本語教師にはなれなかったかも。でも、いくらうまくても日系人が好まれてうらやましいと思うこともある。
- 韓国のドラマよりも日本のほうがよくできていて面白い。
- 日本語はグローバルに興味を持たれているから、地位は多少下がっても、あまり下がらないと思う。中国語や韓国語はブラジル人には難しすぎる。

#### ⑨ ペドロ・カルヴァーリョ氏（Jポップカルチャー研究所所長、非日系）

〔特記事項〕

- 以前、日本語は日系社会のものだと思われていたが、アニメ、漫画、ゲーム等の人気沸騰とともにブラジルの若者たちが日本語に興味を持ち始めた。
- ブラジルはポップカルチャーファンが世界一多い国。
- ブラジル全国で年196のイベントが開催されている。
  - ① 一番多い州は、日系人がほとんどいないマラニョン州。
  - ② イベントでは、日本文化が使われ、たいていワークショップの形で日本語教室等が開かれる。
  - ③ 年齢は若い。30歳以下、20、21歳ぐらい。そのあとは行かなくなる。日本文化は面白い入り口。
  - ④ 年間1,750万人のJポップカルチャーの参加者がいる。
  - ⑤ イベントの入場料は安く、C,Dクラス。しかし広い範囲をとらえる。
- 私のきっかけは父がゴジラを好きだったこと。
- 日本の漫画の魅力は日常が語られていること。他国のとは違う。
- 日本のやり方は、アニメを使って関連グッズを売ること。カード、ゲーム、アニメソング、関連雑誌、タイアップ賞品…。ディズニーとは違って最初から全ビジネスプランを作る。

- アニメイイベントは州の奥地で頻繁に開催され、あまり子供っぽくない内容が好まれる。
- リオで、ポップカルチャーファンの中から、日本語学習者はたくさん出てくると思う。ニーズに応えるのは公文。
- エスコラ・ジ・サンバがコスプレの衣装の作り方をカーニバルの衣装づくりに取り入れた。カーニバルでもコスプレの連を作ろうとしえている。
- 今年日本で行なわれたコスプレ大会の優勝者はブラジルチーム。これが三勝目。(全部サンパウロ)
- コスプレのプレゼンは全部日本語。
- 以前のアニメファンは男性中心だったが、最近は男女のバランスがとれている。おそらく少女マンガがあるせい(米国にはそれがない)。
- コスプレのコンクールの審査基準は、衣装、プレゼンテーション、忠実性。日本のコスプレは劇はやらず、仮装のみ。このようなプレゼンを始めたのは欧米。劇をするから日本語ができなくてはならない。
- 日系コミュニティでも、盆踊りは伝統的な音楽ではなく、アニメソングでやるところもある。
- 日本を紐帯とするコミュニティはすでにある。なぜなら若者はアニメ、ゲーム、コミックに興味を持ち、そこから日本語の新しい世界を発見したから。
- K ポップも勢いが強く、日本より大人向けが多いから、ブラジルでは将来性がある。
- 漫画に日本語は必要です。字幕でなく理解するため。また日本語は文化的背景理解が必要だから、翻訳だけには頼れない。

#### (4) 収集資料

- 聞き取り調査録音データ
- 『リオデジャネイロ州日本移民 100 年史』(リオデジャネイロ州ブラジル日本移民 100 周年祭・日伯交流年実行委員会編)

#### II. ブラジル北東部 J ポップカルチャー調査

研究課題：ブラジル北東部における J ポップカルチャーの受容

用務地：ブラジル国リオデジャネイロ、サンルイス (マラニャオン州)、フォルタレーザ (セアラ州)、ゴイアニア (ゴイアス州)

出張期間：2012 年 8 月 18 日～2012 年 9 月 2 日 (正味 10 日)

#### 1. 調査の概要

平成 23 年度にリオデジャネイロで「日本人社会」「日系コミュニティ」「日本語人」の 3 つのコミュニティの人々に聞き取り調査をしたところ、どの人からも共通して、今後のブ

ラジルにおける日本語のプレゼンスは、Jポップカルチャーによって支えられるだろうということが指摘された。中でも印象的だったのは、リオデジャネイロのJ-POP研究所長のペドロ・カルヴァーリョ氏のインタビューだった。その中で、ブラジルでもっともJポップカルチャーのイベント数が多いのが、日系人のほとんどいない北東部の町、サンルイスとフォルタレーザであることが知らされたのだった。

そこで、今年度は、その背景には何があるのかを探るために、その両都市の代表的なJポップのイベントの実行グループのリーダーを訪ねた。また、この二都市の日本語教育事情を併せて知るために、同地で日本語教育に従事している方々にも聞き取り調査を行なった。さらに比較の対象として、北東部ではない都市ゴイアスも訪問した。

本調査は、本研究の研究協力者であるサトミ・キタハラ教授（リオデジャネイロ州立大学）に代わって、同大学のエリーザ・マサエ・ササキ客員講師が同行した。

## 2. 聞き取り調査について

調査対象者：聞き取り調査は、以下の方々に行なった。

### ① サンルイス

- ◆ 「マツリ」実行メンバー
  - ミゲル・ブラーガ
  - マリーザ・ホーザ・メンジス
  - クレウソン・ホベルト・コヘイア
  - アウド・フェヘイラ・レイチ・ジュニオール
  - ブレーノ・リマ
- ◆ 日本語教育関係者
  - 山田清（日伯文化協会）
- ◆ その他
  - クラウヂア・バホス（メンバー友人）
  - ソランジ・ジ・ブリット・リマ（ブレーノの母親）
  - マユミ・カワグチ（ササキ氏の友人、日系人）

### ② フォルタレーザ

- ◆ SANA実行グループリーダー
  - イゴール・ルセーナ
- ◆ 日本語教育関係者
  - ラウラ・テイ・イワカミ（セアラ州立大学教授）
- ◆ その他
  - アビマエル・マルケス（セアラ州立大学大学院生）

### ③ ゴイアス

- ◆ マリア・クリスチーナ・ヴィドッチ・ブランコ・タヘガ（ゴイアス連邦大学教

授)

### 3. 調査結果要旨

#### 1. 北東部の2つのビッグ・Jポップ・イベント

##### (1) サンルイス最大のJポップイベント「マツリ」

- ◆ ブレーノ・リマが創始。身体に障害があったが、日本語を習い始め、字を書く練習を通してかなり回復。家族の支えでイベントを実現。現在はオンラインショップも経営。
- ◆ ブレーノが始めたイベントをミゲル・ブラーガが引き継ぎ、マーケティングの手法を取り入れて、2006年に第一回「マツリ」を開催。現在は隔年で実施、2010年の第四回は1千人、2012年の第五回は2000人を上回る人が訪れるサンルイスの代表的なJポップイベントに。
- ◆ 順調な発展を遂げているが、悩みの種は公的支援を受けられないこと。

##### (2) 北東部最大／ブラジル第二位のJポップイベント「SANA」

- ◆ 2001年に開始。毎年開催で、今年は12回め。やはり最初は友人同士の集まり。
- ◆ 第1回：220名、第2回：700名。この好反応に本腰を入れる決意。第3回よりマーケティングの手法を取り入れる。以後、5000人（第4回）→12,000人（第5回）→20,000人（第6回）→32,000人（第7回）→41,000人（第8回）→50,000人（第9回）。
- ◆ 成功の秘訣
  - 「日本ブラジル文化基金」の創設
  - 脱オタクを図ったこと（ポップカルチャー以外の日本文化も）
  - 職能開発教育の場として活用したこと →公的支援の獲得へ
  - 政治力（父親が連邦議員で叔父はフォルタレーザ市の副市長
  - コスモポリタン化：日本の枠にとらわれない。

##### ※「マツリ」と「SANA」

・「SANAはあまりに大きくなりすぎて主要なことを忘れている。つまり底辺、人間的なもの、ファンを忘れている」（ミゲル）

#### 2. ブラジルにおけるJポップカルチャー人気

##### (1) 「違う」ものを求めて：「オータナティブな文化」

- ◆ なぜ「Jポップカルチャーが好きなのか」という問いに、「多くの人の口をついて出てくるのが「違っていいから」。
- ◆ 好みの対極にはブラジルの文化？ Jポップカルチャーを好きな人には、ブラジルの文化が好きになれない人が多い印象がある。



- ◆ 山田清のコメント「それは全体から見れば1%にも満たない」「ブラジルのこの社会、文化に満足できない連中」「既成の文化というものに満足できない」

(2) なぜ北東部か？

- ◆ キーパーソンの存在が大きい
  - オタクではないが、自分もかつてはオタクのように日本のアニメやマンガを愛した。
  - 経営的専門性に裏打ちされた経営手腕を持つ。
- ◆ 「違う」要因が大きい
- ◆ サンパウロの業者の利害と一致したため、サンパウロの業者がてこ入れした。

(3) 日本語とJポップカルチャー

- ◆ Jポップカルチャーは、あきらかに若者たちにとっての日本語への道
  - ブラジルの日本語講座は受講生の8~9割の動機がJポップカルチャー
- ◆ 日本語ばかりでなく日本文化への入り口
- ◆ 「日本文化」のイメージは変わるか？
  - これまで日本は「伝統」と「モダン」の両方を併せ持った国。その「モダン」の部分にもう一つポップカルチャーが加わっただけ？
- ◆ 〈紐帯〉はむしろJポップカルチャー？

### 3. 収集資料

- 聞き取り調査録音データ

### III. 本調査結果の発表

[口頭発表]

- 武田千香、「ブラジル・リオデジャネイロ調査報告」、科研「紐帯」としての日本語研究会、2011年12月8日、東京外国語大学。
- 武田千香、「ブラジル・北東部調査報告」、科研「紐帯」としての日本語研究会、2013年1月24日、東京外国語大学
- ササキ・マサエ・エリーザ（研究協力者）「ブラジル北東部日本ポップカルチャーフィールド調査報告」、リオデジャネイロ州立大学 第6回東洋古典文学会／第二回東洋文学全国大会、2013年5月7日。
- ササキ・マサエ・エリーザ（研究協力者）「ブラジルにおける日本人移住と日本ポップカルチャーの関係」、第14回ラテンアメリカ・アジア・アフリカ学会世界大会「アジアとアフリカ：ラテンアメリカからの連携・交流・接近」、2013年8月13-17日。